

ウメ ‘白加賀’ の安定生産に向けた受粉用品種の検討

～開花時期と花粉の発芽率を比較～

本県で栽培事例の少ないウメ品種を対象として、開花時期および花粉の発芽率を調査し、‘白加賀’の受粉用品種としての適性を検討しました。調査品種の中では‘和郷’が最も有望であると考えられました。

1. 背景と目的

本県においてウメは、カキに次いで多く栽培されている果樹品目ですが、年によって収穫量が大きく変動することが問題となっています。本県の主力ウメ品種である‘白加賀’は自家結実性が低いため、他品種による受粉が必要となります。しかし、暖冬で開花が早い年には既存の受粉用品種である‘南高’等との間で開花時期にずれが生じ、受粉が十分に行えず、収穫量が減少してしまう可能性があります。

そこで、本県で従来から栽培されている品種に加えて、栽培事例の少ない品種を実際に栽培し、開花時期や花粉の発芽率の観点から、本県における‘白加賀’の受粉用品種として適性の高い品種を検討しました。

2. 研究成果の概要

果樹・薬草研究センター（五條市）内の雨よけハウスで、‘白加賀’および受粉用品種候補8品種のポット樹の開花時期を、2023～2025年の3カ年調査しました。その結果、‘和郷’、‘林州’および‘八郎’の開花期間が、現地で広く用いられている‘南高’と‘鶯宿’に比べて長く、また‘白加賀’との開花期合致日数も長いことが明らかになりました（図1）。

また、2025年3月の開花期に花粉の発芽率を調査したところ、‘和郷’の花粉発芽率は‘南高’より高く、‘鶯宿’と同程度でした（図2）。一方、‘林州’の発芽率は‘南高’並であり、‘八郎’の発芽率は‘南高’に比べて低い結果となりました。

これらの結果から、今回調査した品種の中では‘和郷’が、本県における‘白加賀’の受粉用品種として最も有望である可能性が示されました。

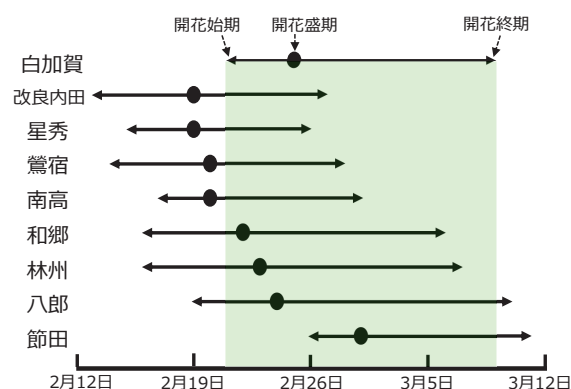


図1 ウメの開花時期の品種間比較
雨よけハウスにおける2023～2025年の平均日を示す

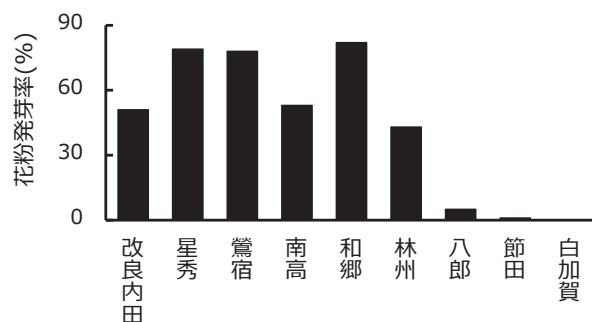


図2 花粉発芽率の品種間比較（2025年3月調査）

3. 実用化に向けた対応

センター内および現地で開花期を継続調査するとともに、‘和郷’自体の収量や果実品質を調査します。また、‘和郷’の導入によって実際に‘白加賀’の生産量が向上するかについて、現地実証を検討します。

（果樹・薬草研究センター 辻本誠幸）